

令和8年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(総合型選抜Ⅰ)

課題論文

(地域学部 地域学科 国際地域文化コース)

(注意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は3ページ、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚である。
指示があってから確認し、乱丁、落丁、印刷不鮮明の箇所等がある場合は、ただちに試験監督者に申し出ること。
3. 解答は解答用紙(横書き)に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙を利用してよい。
5. 解答用紙を持ち帰ってはならないが、問題冊子(及び下書用紙)は必ず持ち帰ること。

次の資料は、小川さやか『「その日暮らし」の人類学——もう一つの資本主義経済』第1章からの抜粋である。これを読んで、次の問いに答えなさい。

問1 下線部①「直接体験の原則」とはどのような原則か、本文に即して200字以内で説明しなさい。

問2 下線部②では、数多くの人類学者が所有とその影響に着目したことが述べられている。これをふまえ、所有がもたらす影響についてどう考えるか、具体例を挙げながら800字以内で述べなさい。

【資料】

ダニエル・L・エヴェレットが『ピダハン——「言語本能」を超える文化と世界観』（みすず書房、2012年）で描いた暮らしは、おそらく現存する人類社会において究極の Living for Today である。

エヴェレットは、1977年、アメリカの福音派教会から派遣された伝道師として、狩猟採集民ピダハンにキリスト教を布教するためにアマゾンの奥地に赴く。その後、彼は、ブラジルのサンパウロ州立カンピナス大学の大学院言語学コースに入学し、いずれ聖書をピダハン語に翻訳する心づもりで、言語学的調査のために再度アマゾンの奥地に入る。エヴェレットはそれから足かけ30年あまりもピダハンと生活を共にすることになるのだが、ピダハンとの暮らしはやがて彼に信仰を捨て、無神論者になることを決意させる。

同書が開示したピダハンの世界は、驚くべきものだ。アマゾンの先住民には豊かな物質文化があることが報告されているが、ピダハンには芸術作品どころか、道具類もほとんどつくらない。物を加工することがあっても、長くもたせる手間はかけない。肉の塩漬けや燻製くんせいといった保存食もつくらず、食べられるときには食べつくし、ときには何日も食べない。彼らは熟睡しない代わりに、いつでもどこでも転寝うたたねをする。人類学者が好んで調査してきた、儀礼らしき行為も存在しない。葬式や結婚式、通過儀礼もない。創世神話も口頭伝承もない。曾祖父母やいとこの概念も存在しない。それどころか彼らの言語には、ありがとうやこんにちはなどの「交感的言語」も、右左の概念も、数の概念も色の名前もないのである。

当初、エヴェレットは、このようなピダハンの文化を残念に思っていたらしい。だが、彼の言語学的調査は、このような「動物的」にすらみえる彼らの文化を理解する、一つの重要な切り口を導き出す。それが、直接体験の原則①である。

「叙事的ピダハン言語の発話には、発話の時点に直結し、発話者自身、ないし発話者と

同時期に生存してきた第三者によって直に体験された事柄に関する断言のみが含まれる」(注1)。

ピダハンの言語には、過去や未来を示す時制がきわめて限定的にしか存在しない。わたしたちは、「わたしは、「友だちが『あの店のラーメンはおいしかった』とみんなが言っていた」と話すのを聞いた」といったかたちで、一つの構文のなかに何重にも「 」を入れ込んで、「あの店のラーメンがおいしかった」とする内容を拡張していくことができる。チョムスキー(注2)の生成文法では、この再帰性(文のある構成要素を同種の構成要素に入れ込む力)を特徴づける文法能力をあらゆる人間に備わっている普遍的な能力だとしてきたが、ピダハン語にはこの入れ子状の文がなかったのだ。

直接体験の原則は、ピダハンがなぜその場限りの道具しかつくらなかったり、食料を保存しなかったり、創世神話や口頭伝承がなかったり、血縁関係に曾祖父母が含まれないのかをうまく説明した。つまりピダハンは、実際に見たり体験したりしたことのない事柄——わたしたちが「過去」や「未来」と位置づける事象や伝説・空想の世界——に言及しないし、そもそも関心を示さないのだ。

過去や未来を語らないことは、過去や未来、抽象的な概念を持たないこととイコールではないが、ピダハンのほとんどの関心が「現在」に向けられており、それゆえ彼らが「現在」をあるがままに生きていることは興味ぶかい。彼らは直接体験したことのない他の文化に興味がなく、自分たちの文化と生き方こそが最高だと思っており、それ以外の価値観と同化することに関心がない。彼らはよく笑う、自身に降りかかった不幸を笑う、過酷な運命をたんと受け入れる。未来に思い悩むわたしたちに比べて、何やら自信と余裕がある。彼らは他人に貸しをつくらないし、他人に負い目を感じることもない。彼らにとって一日一日を生き抜くために必要なのは、直接体験に基づく自身の「力」だけである。

ピダハンはやや極端な例ではあるが、彼らの文化の主な特徴——^{とぼ}乏しい物質文化、その場で消費しつくす傾向性、貯蓄や技術的な発展に関する無関心など——は、世界各地の狩猟採集民の民族誌を紐解けば、それほど珍しいものでもない。現在を生きることは、富の蓄積や財の扱いに対する特有の態度とも深く関係している。そして、こうした態度は、研究者により、ヒトの進化と平等主義をめぐる問いと深く関連づけられて検討されてきた。

人類学の古典的名著である『石器時代の経済学』(法政大学出版局、1984年)においてマーシャル・サーリンズは、「狩猟採集民は食糧の獲得に必死で、飢えに苦しんでいる」といった伝統的な「未開」社会理解を打ち崩した。彼は、さまざまな資料から、狩猟採集民は絶え間ない労働どころか、農耕民や現代人と比しても労働時間は短く、余暇を楽しみ、欲求の充足された「始原(注3)のあふれる社会」に生きていることを提示したのである。サーリンズは、物質的に豊かなはずの世界こそ、ごく一部の人間が富を独占し、多くの人びとが飢えており、文化の進歩につれて相対的にも絶対的にも飢えの量が増大してきた、

という逆説を主眼として、次のような結論を導き出す。

「狩猟＝採集民の生活は、その情況にせまられて、やむなく客観的に低い生活水準にとどまっている。しかし、それが彼らの目標なのであり、しかも適切な生産手段もあたえられているので、すべての人々の物質的欲求は、ふつうたやすく充足されている」(注4)。

狩猟採集という経済実践のほんとうの障害は、労働生産性、すなわち「働かない」ことではなく、必ず直面する収穫逡減(注5)であり、それゆえ移動が暮らしに埋め込まれていることにある。移動を常とする狩猟採集民にとって物質的「富」は、文字通り重荷でしかない。しかしもっとも未開な人びとは、ものを持たないゆえに貧困ではなく、ものを持たないからこそ貧困ではなかったのだとサーリンズは指摘した。貧困が財の多寡ではなく、一つの社会的ステイタスを意味すると仮定した場合、そもそも「物質的重圧から比較的自由」で「なんの占有欲」もなく「所有意識が未発達」な「非経済人」の彼らのあいだには、貧困は発生しないと。

その後、数多くの人類学者が所有の問題を再考した結果、狩猟採集民は所有意識を持たないのではなく、個人の狩りの技量や捕獲量の差により不平等が発生し、特定個人が威信を持たないようにする実践をおこなっていることが明らかにされていく②。ここで重要なことは、未来や過去を前提とした生産主義(注6)的な生き方は普遍的なものではなく、またそのような生き方は当事者たちにとって必ずしも「不幸」で「貧しい」ものではないということである。

注1…ダニエル・L・エヴェレット『ピダハン——「言語本能」を超える文化と世界観』(屋代通子訳)みすず書房、2012年、187-188頁

注2…言語学者・哲学者のノーム・チョムスキー

注3…物事の始め、起こり

注4…マーシャル・サーリンズ『石器時代の経済学』(山内昶訳)法政大学出版局、1984年、52頁

注5…一定の土地からの収穫量は、資本・労働の投入量の増大に応じてある点までは増加するが、その点を超えるとしだいに減少する現象を意味する

注6…生産性向上を重視する考え方で、効率化や大量生産が追求される

【出典】小川さやか『「その日暮らし」の人類学——もう一つの資本主義経済』光文社、2016年、35～40頁

※適宜、文章の一部を省略し、ルビと注釈、下線を追加するなどの改変を加えた。